

博麗靈夢の問答

絶望先生と東方と涼宮が好きな人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

セリフだけで展開していくような話を書きたくて書きました。

シリアス短編は久しぶりかもしれません。

レイマリなのでしょう。これは……。

目次

博麗霊夢の問答

1

博麗靈夢の問答

目の前には先のががった黒い帽子。

「よっ！」

「ねえ魔理沙つてもしかして暇なの？」

「暇ではないぜ？　ただ靈夢のところに遊びに行く時間が必要枠なだけだ」

「ふーん」

「興味なさそうに思えて実は嬉しかったり？」

「なわけないでしょ。で？　今回は何しに来たの？　ま、どうせ特に理由はないとか言

うんでしょうけど」

「勝手に自己完結しないで欲しいぜ。広い意味で」

「広い意味……？」

「今回はな、いくつか質問したいことがあつて来た！」

「質問？」

「嘘つかず正直に答えてくれるとありがたいぜ」

「私は嘘なんてつかないわよ……多分」

「じゃあ聞くぜ？ 私とアリスならどっちが大事だ？」

「はっ？」

「聞こえなかったか？ ならもう一度言うが」

「違うわよ。聞こえたけど意味が分からなかったの」

「じゃあ質問を少し変えてみるか……えっと、霊夢が人間の中で一番仲が良いと思うやつって誰だと思う？」

「私と一番仲が良い人間？」

「そうだけ」

「うーん……そもそもよく喋る人間なんて魔理沙や咲夜、あと早苗くらいだし……。でもまあ、その中ならやっぱり魔理沙かなあ」

「そうか？ 照れるぜ！」

「はっ？ なに、こんな質問なんかして自己満にでも浸りたいわけ!? そんなので私の時間を奪う気なら殴るけど」

「違う、違う。まあ落ち着けて。質問はまだ続くんだから」

「え〜」

「嫌がるなよ、霊夢のためを思っって言ってるんだから……。いやまあ正確には、霊夢が望んでることをしてるんだから」

「はっ?」

「じゃあ次の質問。霊夢が今度は妖怪の中で一番仲が良いと思うやつって誰だと思う?」

「妖怪の中で?」

「そうそう」

「うーん……妖怪となると今度は候補が多すぎて大変ね」

「まあここが妖怪神社と言われる所以だな」

「失礼ね! 合ってるけど」

「まあそれはともかく。ほらほら早く答えてくれよ!」

「ええ……。うーん、紫? いや萃香? それとも……えつと、やっぱりアリスかなあ。

「魔理沙と同じ、昔からの仲だし」

「幼なじみってやつだな!」

「ええ、そうね」

「じゃあ改めて聞くぞ?」

「えっ?」

「私とアリスならどっちが大事だ?」

「聞き間違いではないよね……なぜそんなことを聞くの?」

「質問を質問で返すなよ」

「むっ」

「もう一度聞かざれ？ 私とアリスならどっちが大事だ？」

「そんな決められるわけないでしょ。そもそも博麗の巫女は平等に接するもの、どっちも何もないわよ」

「そりゃあ無理があるぜ、靈夢」

「どこがよ」

「靈夢は早苗と咲夜と私の中から一番仲が良い人間として私を選んだわけだし、数多い妖怪の中からアリスを選んだわけだ。まあ正確にはアリスは魔法使いなんだけども、ここは考えずに。でな？ そんな風に特に仲が良い相手を抜粋してる時点で、靈夢に平等とかを言う資格はないと思うわけだ。分かるだろ？」

「あんたそんな性格悪かったっけ？」

「逆に靈夢の中の私はこんなイメージなのか？」

「はっ？」

「ん？」

「なんか今日の魔理沙、いまいちやりにくいわね。変なものでも食った？」

「キノコは三食ちゃんと食べてるぜ？」

「ちやんとつて言うのかしら」

「でまあ、話を続けるぞ？　結局霊夢はさあ、アリスと私どっちの方が大切なんだよ。そんな言い訳なんかしないでちやんと答えてくれよ！　嘘はつかないんだろ巫女さん！」

「ちよちよつと……そんな強く言わなくても……」

「ところで霊夢は幻想郷の調停人なんだろ？」

「えっ急にどうしたのよ」

「閻魔様とはまた違うのか？」

「ちよさっきの続きはどうしたのよ」

「おい質問してるのはこっちだぞ」

「はあ!？」

「幻想郷の調停人つて、閻魔様とは何が違うんだ？」

「そ、そりやあ……閻魔様は死後の裁き、私は生前の裁きをするのよ。どんな魂も必ず死後裁かれる、それも白黒しつかりつけられて間違はなく、ね。でもとはいえ、大罪人を生きてる間ずっと野放しにしているわけにもいかないでしょ？　そこで私の出番つてわけ」

「ふむふむ」

「悪いことをする人間はね、生前も、死後も、裁かれるのよ。死後は閻魔様に任せきりだ

けど、生前は私が裁くの。責任を持ってね」

「なるほど、よく分かった！」

「それにしてもやっぱり少しおかしいわよ、今日の魔理沙。大丈夫？ 風邪でも引いた？」

「いつも通りだから安心してくれだぜ！ おかしく感じたとしたら、それは霊夢の問題だ！」

「はあ？」

「それとだ、霊夢！ まだ質問タイムは終わってないんだぜ！ 閻魔様のことなんだが、ふと思っただが、相手が嘘をついてたりしたらどうするんだ？ 正しく裁けるのか？」

「それは安心しなさい。閻魔様にはね、浄玻璃の鏡という道具があつて、その鏡の前ではその人間の過去が洗いざらい映し出されてしまうのよ。嘘を吐くどころか、弁明すら許されないわね。必要ないのだから」

「ほお、そんな便利な鏡があるんだなあ、そりやあ隠したくても隠せないよなあ」

「あら、隠したいことでもあるの？ 盗みとかはもうバレバレだからね？」

「そうじゃなくてだな」

「ふふ、魔理沙のかくしごと、気になるわね」

「そういえばさ」

「ってまた話変える気？」

「最近の私って、お前から見てどんな感じだった？」

「最近の魔理沙……？」

「そうそう」

「えっと、うーん……特に変わらない様子だったような……」

「本当にそうだったか？」

「えっ」

「思い出してみろよ、本当にそうだったか？」

「えっ、えっ？」

「博麗霊夢。私はよく知ってるぞ、お前のことを。そして、お前が為したこと、為してしまったこと。あらゆることを知っている」

「ちよどうしたのよ魔理沙？ 本当に大丈夫？ とりあえず永遠亭にでも……」

「お前自覚してるのか？ お前が霧雨魔理沙を追い込んでたことを」

「えっ……!？」

「自覚してるよな？ でも逃げてるんだ」

「ちよやめてよ、魔理沙！ なんてそんなこと言うのよ！ あなたおかしいわ、早く永琳

のところ……」

「確かに最近の霧雨魔理沙はおかしかった。家にこもりっぱなしで独り言も多かった。久しぶりに靈夢に会いに来たと思ったら、新しい魔法を紹介するとか言って失敗して爆発してたよな？」

「そ、そうだったかしらね……」

「で。そのとき靈夢はなんて言ったか覚えてるか？」

「えっ、そ、その」

「覚えてないよなあ？ だって無関心だもんなあ、お前」

「なっ!!? お、お願いだから落ち着いてよ、魔理沙！ 意味わからないことばっか言わないでー！」

「まあ聞け、そして思い出せ。お前こう言ったんだよ。『今回はたまたま失敗したのよ。次から頑張ればいいじゃない』」

「!？」

「アリスの証言は聞いたよな？ アリスはこう言ってたよ。『魔理沙は最近、的はずれな研究ばかりしていた』って。焦って、焦って、どンドン人間を超えてゆく靈夢に追いつこうとして、狂っちゃったんだろうなあ」

「や、やめて……!？」

「そこに霊夢の次がある発言だ。次なんかなかったのさ、普通の魔法使いに。そんな魔理沙にとつて、その言葉はトドメを刺すには十分だった」

「お願い、やめて……。ねえ……。魔理沙。や、やめて……」

「ところで霊夢。お前つて何なんだ？」

「えっ？」

「博麗の巫女つて、結局何なんだろうなあつて思つてさ」

「えっいつもの魔理沙に戻つたの……？」

「おい霊夢く質問してるんだから答えてくれよ」

「博麗の……？ ああ、博麗の巫女ね。そりやあこの博麗神社の巫女のことよ」

「でもお前つて本当にただの巫女なのか？ ただの人間なのか？」

「なに、化け物とか言う気？」

「いや化け物というよりは神に近い」

「褒めても何も出ないわよ？ ……あれ。そもそも神に近いつて誉め言葉なのかしら？」

「？」

「褒めてるんじゃないよ、普通にそう思つたんだよ。霊夢つて神様なんじゃないのかつて」

「？」

「ふーん。どうして？」

「あつ次の質問をするぜ！」

「えっ、さっきのは答えてくれないの？」

「質問してるのはこっちだぜ！」

「はいはい。で、何よ？」

「生きてるやつと死んでるやつ。どっちを優先する？ 霊夢なら」

「質問の意図が分からないんだけど」

「だからさ、もし、生きてるやつと死んでるやつが困ってて、どっちかしか助けられないとしたら、どっちを優先するんだって話なんだよ」

「ええ……いやそもそも死んでるやつは助けられないでしょ」

「西行寺幽々子とかを見てもそう言えるのか？ 魂がふわふわ飛ぶ世界なんだぜ！ こ

こはー」

「ぐぬぬ」

「それに。死んでると言ってもそいつの名誉とか記憶は残り続けるんだ。その名誉や記憶を守ることは、その人間を助けるってことにはならないのか？」

「な、なるほど……」

「じゃあここで改めて質問するぜ。生きてるやつと死んでるやつ、どっちを助ける？」

「生きてるやつ」

「こりやまた即答だな」

「だってそうじゃない。死んでるやつより生きてるやつの方が脆いし、死んでるやつより生きてるやつの方が未来があるからね。優先順位なんて自明よ」

「ふむふむ。流石霊夢だ、有言実行だな！」

「はっ？」

「じゃあそろそろ最後の質問にするぜ！」

「ようやくね。もう色々と疲れたわ、早くして」

「アリスは今何してると思う？」

「えっアリス？ うーん……人形でも作ってるんじゃない？ それとも人里で人形劇とか」

「残念！」

「えっじゃあ何してるんだろう……パチュリーのところに行ってるのか？」

「それも違うぜ！」

「ええ……じゃあ分からないわよアリスのことなんて！」

「さっきアリスの家に行ったの？」

「えっ？」

「なあ霊夢、正解を教えて欲しいか？」

「ちよ」

「教えて欲しいか？」

「そ、そりゃあ教えて欲しいわよ」

「本当に？」

「本当よ」

「本当の本当に？」

「本当よ！ もう焦らさないでよ！ 早く正解を教えて！」

「なら教えよう」

「魔理沙と喋るといつも時間が勿体無いわ、早く教えて」

「正解はな……『霧雨魔理沙と楽しそうに喋ってる』だ！」

「へえ……ふーん……ん？ えっ？ 霧雨魔理沙と？」

「そうそう」

「えっ魔理沙と？」

「そうだけ、違いがないぜ。まあ真正銘の霧雨魔理沙ではないがな」

「じゃあ私の前にいる霧雨魔理沙は？ あなたは誰なの!？」

「それも霧雨魔理沙だけ。といってもアリスと同じタイプののだが」

「アリスと同じタイプの魔理沙……？ それってどんな魔理沙なの？」

「教えて欲しいか？」

「そ、そりゃあ……」

「なら今までの質問を振り返ってみようぜ？」

「えっ？」

「まず私が、というかお前が、博麗霊夢は神に近いと思つた理由について話そう！」

「それは気になつてたけど……えつなにか関係があるの？」

「関係大有りだぜ！　というか、関係ない話は何一つしてない。これは誰でもない博麗霊夢、お前の葛藤だからな！」

「どういふことなの……意味が分からないわ」

「お前がお前自身を、神に近いとおもつた理由。それはな！　その傲慢さにある！」

「傲慢さ……？」

「そう傲慢さだ。神さえも恐れぬ所業、と言えればいいかな。魂を成仏させることができ
る博麗の巫女……しかし、魂自体を消滅させるなんてはや神の特権だろ？　なあ霊夢
？」

「魂自体を消滅？　何を言ってるの魔理沙！」

「お前はお前自身に皮肉を言っていたんだよ。そんな傲慢なんて神じゃないと到底許さ
れないものだ、ってね」

「それってどういふ……」

「次に！ 浄玻璃の鏡について話そう！ 確か靈夢はさつきこう言ったな？ 『浄玻璃の鏡という道具があつて、その鏡の前ではその人間の過去が洗いざらい映し出されてしまふのよ。嘘を吐くどころか、弁明すら許されないわね』と。それと、こんなことも言つてたつけなあ…… 『どんな魂も必ず死後裁かれる、それも白黒しつかりつけられて間違はなく、ね』的な。ふむふむ……どんな魂もねえ……」

「何が言いたいのよ？」

「どんな魂も閻魔様に裁かれる、そして浄玻璃の鏡の前では全て洗いざらい発覚してしまふ。それは間違いないな？」

「ええ、そうよ。それがどうしたのよ」

「なら真実を隠したいときお前ならどうする」

「真実を隠したい……？ いやいや。どんな魂でも裁かれるのよ？ 隠しごとなんて無理だわ、絶対に」

「どんな魂もねえ……」

「なによ、その顔……。いやだからね？ さつきから言つてるように浄玻璃の鏡の前ではどんな魂だつて……えつ、ま、ま、まさか!？」

「その通りだぜ、靈夢。どんな魂も嘘なんてつけず、浄玻璃の鏡の前で真実を吐露するし

かないんだ。なら、真実を隠すためにできることは一つ。そもそも魂を閻魔様のところに持って行かれないようにする、魂自体を消し去ることなんだよ霊夢……！」

「!?」

「でだ。ところで霊夢」

「また話を変えるつもり……?」

「そこまで話を変えるつもりはない。ただ、蛇足的な質問をもう一回だけする。悪いな……さつきで最後にするつもりだったんだが、まあ許してくれ。質問するぜ? お前が人間じみてないところとして挙げられる特徴、何だと思う?」

「私が人間じみてない特徴?」

「そうだ」

「それってさつきの傲慢さつてやつ……?」

「まあそれもある。普通の人間じゃ、思い付いてもあんな考えを実行に移そうなんてのは絶対に思わないぜ。だが今聞いているのは別の特徴だな」

「えつと強さとか……?」

「まあそれもある。霧雨魔理沙を狂わせるほどの強さ、実に憎たらしい。誰でもないお前自身がそう思っている。だが今聞いているのはまた別の特徴だな」

「わ、分からないわよ……焦らさないで教えて……」

「ああ教えてやる。それはな、恐ろしいほどの勘の良さだよ」

「まあそれは私も自覚してるわよ。で？　それが今までの質問とどんな関係があると言
うの？」

「言うほど関係ない」

「はっ？」

「今までの質問に比べちゃ、どうでもいい質問だよ。言つたら？　蛇足的な質問だつて」

「じゃあなんで質問したのよ」

「それはお前が気にしてるからだよ、靈夢」

「えっ」

『私の勘がもう少し悪ければ……こんな真実に直面しなくても済んだのかなあ』そんな後悔がお前を蝕んでいるのさ。だからそんな質問を己に問いかけてしまうんだろうな
なあ……」

「どういう意味なの？」

「まあ最後まで聞け。この長い問答もそろそろ終わる」

「わ、分かったわよ」

「靈夢は確か、生きてるやつと死んでるやつだったら、生きてるやつを選ぶんだつたな
？」

「ええ、そう言ったわ」

「じゃあ聞くが、ある存在Aが、ある存在Bを思いがけぬ災難により殺してしまったとしてしよう」

「いきなり物騒な話ね」

「霊夢はその場に居合わせてしまったとする。そして、霊夢にとってその二人、AとBは大事な親友だった。このままではAが罪により捕まってしまう。さてどうする？」

「どうするも何も……自首させるしかないんじゃないの？」

「まあ普通はそんな発想に至るよなあ。でも、他人事じゃなくリアルで考えてみる。お前ならどうする？ 死人よりも生きてるやつを優先する、そんなお前ならどうする？」

「ちよそれってどういう」

「そして話は戻って最初の質問だ。なあ霊夢？ お前は……私とアリスならどっちが大
事だ？ 分かるだろ霊夢？」

「魔理沙……それって……!？」

「ああその推測であつてるぜ、霊夢」

「そ、そんな……」

「まあ念のために状況整理をしておこう。いいな霊夢？」

「ええ構わないわ……私」

「なら話そう。霧雨魔理沙は狂っていた……最近は的外れな研究や、命知らずな危険な研究も多くしていた。もうどんなものでもいいから霊夢に追いつける方法を探していたんだろうなあ……。それほどに霊夢が強すぎたのもある」

「ええ、そうね……」

「だが霊夢の無関心な軽はずみな慰めが、彼女の心を確実に完全に壊した。その夜のこと、霧雨魔理沙は黒魔術と言われる禁忌中の禁忌に手を染めようと決心する……」

「そうだったわね、確か……」

「最近の魔理沙の様子を見ていたアリスは、その夜もふと心配になり魔理沙の家へ向かった。そして見つけてしまった、黒魔術を取得しようとしている魔理沙の姿を……！」

「そう聞いているわ……」

「闇の魔力が流れ込んだ魔理沙は理性を失い、暴れ始めた。このままでは魔法の森だけじゃない……人里やあらゆる場所に被害が及ぶかもしれない……そう思ったアリスは少し強引に魔法を使い魔理沙の動きを止めた」

「ええ、そうよ、その通りよ」

「だが。魔法が使えるとはいえ、体は脆い人間である霧雨魔理沙……彼女は呆気なく死んでしまった。アリスの魔法によって」

「これは仕方ないことだわ……誰も悪くない、誰も悪くないの」

「強いて言うなら博麗霊夢。お前の罪かもしれないな」

「そ、そんなことを言わないで……!」

「持ち前の勘の良さで魔理沙の元へ向かった霊夢、何か嫌な予感がした。そしてその予感の中する。霧雨魔理沙は死んでいた……泣きながら彼女の死体を抱きしめるアリヌも霊夢の目に映った」

「そ、そうよ、私はアリスと魔理沙を見つけたの」

「状況を把握した霊夢は何を思ったか、霧雨魔理沙の魂ごと肉体を消し去ってしまった。肉体を消すことで完全犯罪、魂を消すことで死後も完全犯罪が成立だ。もう、アリスを裁けるものはいない」

「だって……! 人間を殺したなんて知られたら、アリスはもう生きていけないわ……人里の外での死は裁く対象ではないとしても! それでも! 勘当された身言えど霧雨家のお嬢様である魔理沙の死は人里中に知られるし! アリスは人形劇を人里でするのがとても好きだったし! ただでさえ魔理沙を失ったショックがあるというのに……これじゃあまりにも可哀想よ……!」

「だから神の所業とも言えるような、魂の消去をお前は実行したのか!? それも親友である霧雨魔理沙に!!」

「うつつくぐ……!」

「魂が消されてしまえばあの世でも暮らせないし、輪廻転生の対象にもならない。もうどこにも存在しなくなるんだ。それは実に悲しいことだよなあ……なあ? 霊夢!」

「つて、でも、でも、そうするしか……!」

「そして、魔理沙を殺したアリスも狂った。アリスは今最高の笑顔でお茶会をしてるぜ。そこにいるはずのない魔理沙と」

「ええそうよ……私が泣いて喚いてるアリスから無理やり情報を引き出してしばらく経った頃……アリスは急に独り言をぶつぶつと喋り始めたわ。丁寧に紅茶まで用意して、魔理沙と話し始めた」

「まあ要するに。霊夢やアリスが喋っていた同じタイプの霧雨魔理沙っていうのは、空想上の霧雨魔理沙ってことだ。真正銘の霧雨魔理沙はお前が魂ごと消しちゃったもん……!」

「つ、つでも、うぐ……!」

「もう泣いて声も出ないか。それでもお前の中の霧雨魔理沙は博麗霊夢を責め続ける。そうだ、お前の中の霧雨魔理沙は博麗霊夢の良心だ! 罪悪感だ! 狂ったアリスを見たとき、正直羨ましかったんだろ? 霊夢! だってあんな嫌なことを、魔理沙がもうどこにもいないことを、アリスは忘れることができたんだもん!」

「つうぐ、えつ、えも……」

「だからお前も忘れることにした。なかったことにしようとした。そして、神社に帰ってきた後お前はまるで何もなかったように平然と過ごしたんだ……魔理沙を魂ごと消したくせにな」

「や、あつ、つうぐ、め……」

「でも結局はお前の中の常識が、良心が、そして霧雨魔理沙への想いが、それを拒んだ。なかったことにさせてくれなかった。アリスのように狂うことさえできなかったわけだ」

「う……っ！」

「改めて聞こう。なあ霊夢？ 私とアリスならどっちが大事だ？ 分かるだろ霊夢？」

「うっ……ぐすっ……もう分かんないわよ、何も、何も……！！」

「お前はもう行動で答えを示してるんだけどなあ、どうにも認めたくないらしい。でもまあ……お前の行動のおかげでアリスは罪に問われないし、状況が状況だから霊夢の行動も仕方ないと思えるし、決して後悔する必要はないと思うぜ？ アリスに関して言えば、狂ったのは狂ったが、隣に魔理沙は居続けるんだらうから、今後も生きてゆけるだろうしな……」

「つうぐ、ぐすっ、つでも……！！」

「まあそれでも。靈夢は一生、魔理沙への罪悪感に苛まれるだろうな。酒も不味くなりそうだ」

「ごめんなさい魔理沙……ごめんなさい魔理沙……!!」

「おいおい私に謝るなよ。魔理沙はもうどこにもいないんだからさ」

「ごめんなさい魔理沙……ごめんなさい魔理沙……!!」

「帽子がくしゃくしゃになるぞ靈夢？」

目の前には先のとがった黒い帽子。

ただ、目の前には先のとがった黒い帽子だけがあった。靈夢が作り出した魔理沙の幻も消え、長い長い自問自答は終わる。

靈夢はその帽子を握りしめながら、一人涙を流していた……。